

(右図左上の一九五七年は一九五九年に訂正)

区分	初霜日		終霜日	
	年月日	年月日	年月日	年月日
平年	二・二	四・四	三・三	三・三
昭和三〇	二・二	三・三	三・七	三・三
三三	一・二七	二・二五	二・元	三・二六
三五	二・三三	四・五	三・三〇	三・元
三六	二・二七	三・五	三・七	二・二
三七	二・三三	四・八	三・七	三・三
三九	二・二四	三・三	三・五	四・四
四〇	二・二四	三・二	三・四	四・四

第二節 異常気象と災害

気象の概要で述べた如く、本町は四面山谷に囲まれ局地的には、一概には言えない複雑な状態であるが、大局的には大変安定した恵まれた気象条件である。特に気象災害は殆んどない状況である。以下過去の主な災害として言い伝えられたもので直接本町の実態の明らかなものを記述することにした。

一、雪害、約七十年前のことである。連日降雪続きで山間の草ぶきの屋根は殆んど軒まで埋もれ、出入り全く不能になったといわれる。その内トンネルを作り交通したが風の吹溜まりの所は二十米以上の雪山ができ、交通は遮断されてしまったといわれる。

食料や薪など準備してなかった人は、家の床板や天井の

板などを燃やし暖をとりソバ粉を煉って主食とした人も少なくない状況であったと伝えられる。当時は一般農家では大体三年分位は食料を貯蔵するのを例としていたので餓死者などは無かったとのことである。

二、水害 文久年間の頃梅雨期に入っても全然降雨無く佐礼谷では部落総出で階上山に登り雨乞いをしていたところ、一天にわかにかき曇りうつつような大雨となり連日続きはじめたといわれる。川の至る所は堰を築き水を止めていたため大洪水となり、田畑や川近くの家屋は流失又は浸水し河岸は崩れ一面河原と化し荒廃地となったと言われる。

当時年中行事の村芝居(人形芝居)もその河原に小屋掛けして芝居したほどだと伝えられる。

中山でも栗田地区の奥の方は、山崩れで谷を埋め奥地は大池の如く水が溜まり、更に溢れ又堰が流失し川近くの水田は殆んど流失したと言われる。又小池部落の上の田(字名)の谷に面した山の七合目位から、地すべりを起しはじめ門前奥は埋没されるだろうと案じていたが、途中で止まり難を逃れたといわれる。この時の名残りは佐礼谷あたりでも現在所々に残っているといわれる。

三、雪害 昭和三十八年一月一日前日強風注意報発令後より降り始めた雪は、連日連夜降り続き気圧は一〇〇二Mbから九九一Mbに下り、風向北乃至北西風・風力四〜五に変わり上旬は降雪みぞれ十二日、下旬一五日を記録した気温最低零下十度から十三度に下った日もある状況である。中山中学校々庭で最大積雪深八〇糎となる。山間部で吹溜りは田・山・畑を一面に埋めつくし地形は全く変形し、山間の

第三章 地 質

第一節 西南日本の中央構造線

日本列島は地質の分布からみて、糸魚川から静岡に至る地帯を境にして東北日本と西南日本に区分され、さらに西南日本は中央構造線によって内帯(日本海側)と外帯(太平洋側)に区分されている。

この線は、諏訪湖の南にはじまり三峯川・水窪川等の天竜川の東に並行する谷を通り、豊川の谷を伝って渥美湾から伊勢に上陸し、紀伊半島の根本を横断して和歌山市に達し、更に四国では吉野川より本県に入り、石鎚山脈の北の麓を通過して川之江・新居浜・周桑の湯谷口・砥部・犬寄峠

農家が野菜その他の副食に欠乏を来たし、逆に町民は他町村より野菜店に運ばれた物を購入し、却って自給できたような珍現象を来たした。国道町すじには除雪車が運行し交通回復をはかり、山間は部落総出で除雪作業を行ない通路を作ったり、部落幹道の通路復旧を計った。
又森林は雪折れ倒伏し、軌道に乗りかけた果樹、特に密柑の凍害裂傷の被害は甚大であった。

などその断層がよくみられる。

砥部町大岩橋の下流で見られる衝上断層は、天然記念物になっているが、犬寄峠のものもそれに劣らず明らかにみられる。

第二節 伊予郡の地質概観

伊予郡地方の土地を形成している岩石は結晶片岩・和泉砂岩・礫岩・安山岩等である。

一 結 晶 片 岩

結晶片岩というのは火山岩や水成岩が地球の深い場所で